

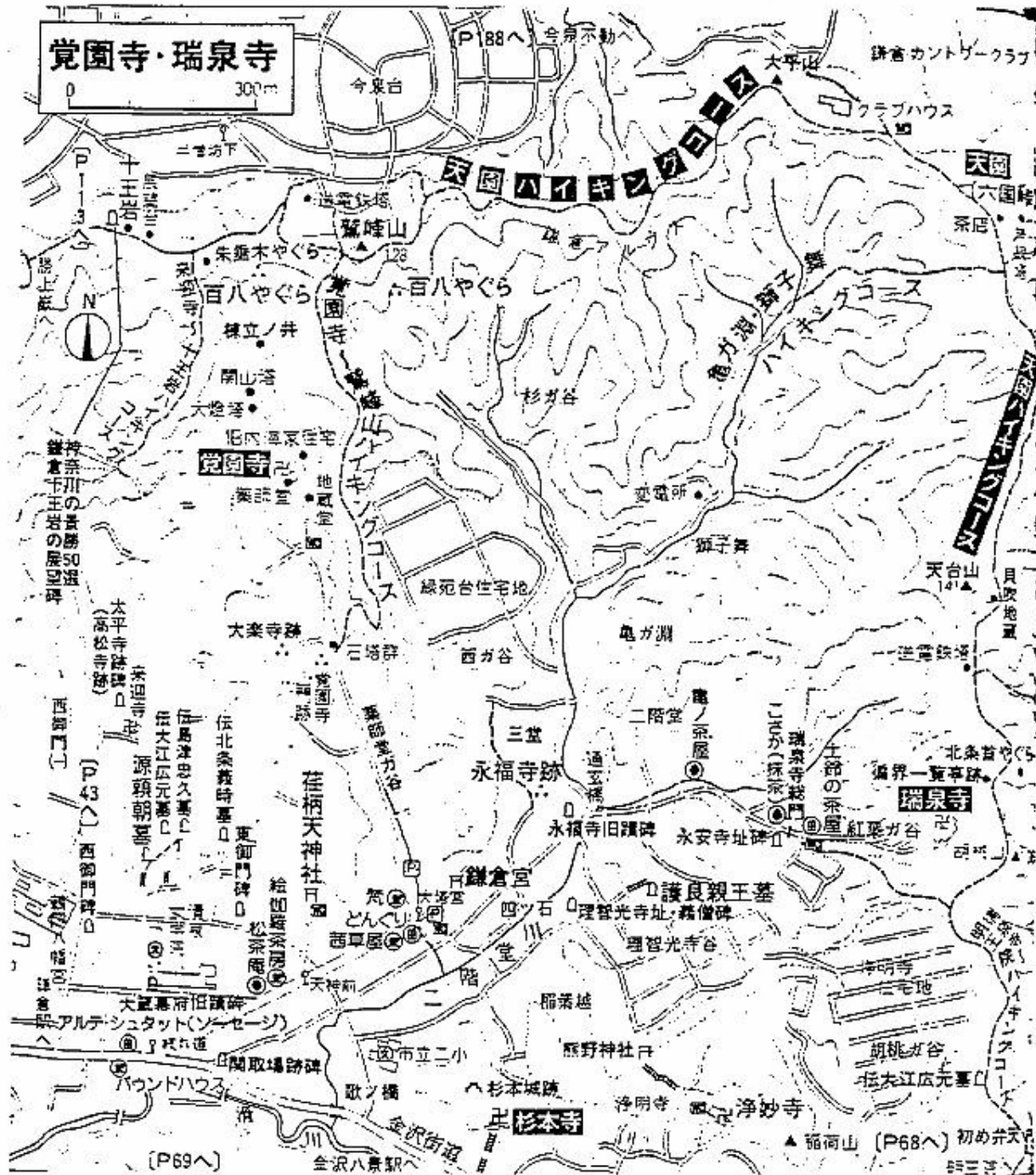
平成五年十一月二十八日（日）

第二〇五回 史跡めぐり資料

晩秋の鎌倉を訪ねて

越谷市郷土研究会

# 党園寺・瑞泉寺



☆第二〇五河史跡めぐり

晩秋の鎌倉を訪ねて――

とき 平成五年十一月二八日

(E)

集合 南越谷駅前 午前八時

コース 南越谷駅～(武蔵野線)

北線)～東京駅～(東海

道線)～戸塚駅～(横須

賀線)～鎌倉駅～大蔵幕

府跡～法華堂跡～頼朝墓

～荏柄天神～鎌倉宮～(

昼食)～党園寺～瑞泉寺

～鎌倉駅～小町通散策

～鎌倉駅～

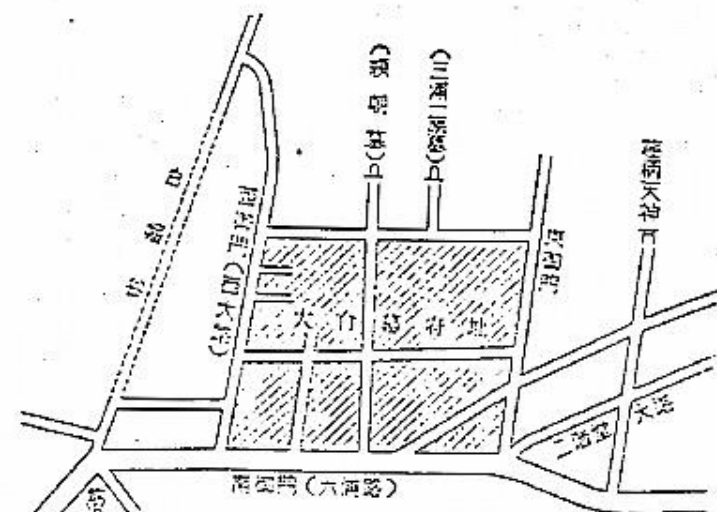
南越谷駅または越谷駅に

て解散 印は徒歩

料金 四三〇〇円

案内 幹事 宮川 進

さて大倉幕府の地であるが、これは大体北は法華堂の地、すなわち今の頼朝の墓のある岡の下を東西に引いた線、南は大倉路、いまの筋違橋から金沢に至る路の線、東は荏柄天神の西で、もとの二階堂大路の分岐点、関取橋のすぐ東から北へ東御門の方へ入る路があったが、その路の線、西は筋違橋から少しく東で、今の西御門へ入る道路が岡の下の道路に合する線、これらの線内の地である。東御門へ入る道と西御門へ入る道の間、すなわち東西の間口は南の線では約二七〇m、八百九十一尺、間数にして約百五十間、約二町半ということになる。この幕府の地は都市の制の戸主の制の丈尺(第十卷)によつたものではなく、農村の町段歩の制によつたものであろうから、それでよからうと思う。南北



図定想址幕府倉大

は約二町、二町半に二町の敷地であったと推定してよいように思われる。「風土記稿」が方六町ばかりとしているのは貸成できない。そしてこの郭内には寢殿(治承四・一二・一二の条)、対屋(建久二・七・二八の条)、大御所(建仁三・九・六の条)、小御所(安和元・五・二四)、建久三・九・一〇の条、常御所(建保四・四・九の条)などがあり、東西南北におのおの門があった。今日の東御門・西御門の地名はこの屋敷の東門・西門の門と、このには道路が通じ、詰士の屋敷があったのである。

頼朝の法華堂はこの幕府の北門外的一段と高いところ、今の頼朝の墓があるところであったらしい。「吾妻鏡」嘉禎元年十月二十日の条に、將軍頼朝の御所を法華堂の下の方に定むべきか、若宮大路に定むべきかについて陰陽師に占わせたところ、法華堂の前の地は西の方に岳があり、その上に頼朝の廟がある。その親の墓が高くてその下に居れば子孫がないと

本文(何の本文か分明でない)に見えている。頼朝には子孫がない。これは本文と符合するといったところ。これは法華堂の所在と大倉幕府の所在とを語るものであって、法華堂がいまの頼朝の墓のあるところであることは殆んど疑いない。ここからは今でも瓦などが出るという。この法華堂は建保元年五月和田合戦のとき朝夷奈義秀が御所を焼いたがこの堂は無事であった。(このとき実朝はここに逃れ、政子は北門を出て鶴岡別当坊に入った)。しかし寛喜三年十月の大火で焼失したので十一月に再興された。

三治元年六月の三浦合戦のときは、秦村以下三浦の一族はここに籠って自殺している。

頼朝の墓はどこにあったか分明でない。しかしどうも法華堂の地でよいように思う。

大蔵幕府跡 ●八幡宮東鳥居から西6分 京

西およそ二町半(約二六〇m)、南北およそ二町(約二二〇m)の敷地の中に、寝殿、封屋、大御所、小御所、常御所、その他多くの建造物があつた。

治承4年(一一八〇年)、鎌倉入りした頼朝は、父義朝の故地である亀方谷に邸宅を営もうとしたが、すでに義朝の菩提をとむらう堂宇が建つており(心掛)、また、土地も手せまだったので断念した。ついで造られたのがこの地であつた。2カ月後には竣工し、頼朝は上総権介千葉広常の邸より移つた。以来、嘉禄元年(一二二五年)までの46年間、武家政治の中心となり、頼朝、頼家、実朝の源家3代はこの大蔵館に住み、政子はその後もとどまつた。

ニカイゲウ

二階堂氏 [藤原南家、工藤氏族] 尊卑分脈に工藤爲憲

時理・時信・維遠(二階堂遠祖)・維兼・維行・行遠・行政・行

光・行盛・行忠・行宗・行貞・行高・高行、また工藤二階堂系

廟に時理・維遠・維光・維行・行遠・行政(二階堂)・行光・行

盛など見ゆ。

行政の後は二階堂系圖に行政

行光 | 行盛 | 行泰 | 行佐 | 行時 | 行憲 | 高憲

行綱 | 頼綱 | 貞綱 | 行朝 | 行道

行忠 | 盛忠

行村 | 基行 | 行氏 | 行景 | 泰行





互いに語るはつい昨日までの繁栄の夢ばかり。夢さめた今は、せめて誉れ高い三浦武士の名に恥じぬようにと、やがて一門の毛利西阿入道せいあが声高らかに念仏をとなえる。西阿入道とは三浦泰村の妹婿で、この朝も甲冑をつけ北条に駈けつけようとするのを、妻の言葉で思いなおして三浦勢に加わっていた。声高に念仏をとなえる心境には、さだめし複雑なものがあつたろうが、それに和して堂内の全員が合掌し、思い思いに刃を我が身におしあてた。念仏に和する声が一人、二人と減るたびに、辺りにうつ伏した屍が重なり、堂の床は血の海と化してゆく。

光村も自害するべく胸おしひろげたが、このとき愛する妻の肌の香がかすかに鼻をくすぐった。光村は出陣に際して妻と小袖を交換し、互いに来世までもと誓ったのだ。無双の美人だった妻の頬に、水晶よりも光る涙が滂沱として流れていたのを、いま鮮やかに思い出す。かくて三浦一族二百七十六人、郎党たちを合わせると五百人余の屍が法華堂の内外を埋めつくしたのである。

それにしても幕府はかなり慌てていた。運よく法華堂はそのまま残ったものの、三浦一族の中でも反北条の急先鋒だった光村と、同じく泰村の弟家村いよむらの屍が見当たらないのである。すると三日後、この惨劇の一部始終を天井の隙間から覗いていた法華堂の一人の法師が召し出された。彼は三浦勢の不意の闖入闯に逃げ場を失って天井裏にかくれたもので、その証言によると、光村は敵に顔を見られたくないといつて、自ら刀で顔の皮を削りとつたところ、その血が頼朝公の画像にまで飛び散つたという。なればこそ光村の屍には誰も気づかなかつたのだ。また多くの者が、敵に首を渡されなかったために法華堂に火をつけることを主張したが、泰村がそれを許さなかつたという。泰村は頼朝の遺徳をけがすのを怖れたのであろう。そして泰村は、三浦一族がこの悲運にあつたのも、亡父義村が多くのを死罪にした報いであつて、北条氏も必ず今にその報いを受けるのであろうから、自分としてはいまさら北条一族を恨む気はないと言つたという。

互いに語るはつい昨日までの繁栄の夢ばかり。夢さめた今は、せめて誉れ高い三浦武士の名に恥じぬようにと、やがて一門の毛利西阿入道が声高らかに念仏をとなえる。西阿入道とは三浦泰村の妹婿で、この朝も甲冑をつけ北条に駈けつけようとするのを、妻の言葉で思いなおして三浦勢に加わっていた。声高に念仏をとなえる心境には、さだめし複雑なものがあつたろうが、それに和して堂内の全員が合掌し、思い思いに刃を我が身におしあてた。念仏に和する声が一人、二人と減るたびに、辺りにうつ伏した屍が重なり、堂の床は血の海と化してゆく。

光村も自害するべく胸おしひろげたが、このとき愛する妻の肌の香がかすかに鼻をくすぐった。光村は出陣に際して妻と小袖を交換し、互いに来世までもと誓ったのだ。無双の美人だった妻の頬に、水晶よりも光る涙が滂沱として流れていたのを、いま鮮やかに思い出す。かくて三浦一族二百七十六人、郎党たちを合わせると五百人余の屍が法華堂の内外を埋めつくしたのである。

それにしても幕府はかなり慌てていた。運よく法華堂はそのまゝ残ったものの、三浦一族の中でも反北条の急先鋒だった光村と、同じく泰村の弟家村の屍が見当たらないのである。すると三日後、この惨劇の一部始終を天井の隙間から覗いていた法華堂の一人の法師が召し出された。彼は三浦勢の不意の闖入に逃げ場を失って天井裏にかくれたもので、その証言によると、光村は敵に顔を見られたくないといつて、自ら刀で顔の皮を削り取ったところ、その血が頼朝公の画像にまで飛び散ったという。なればこそ光村の屍には誰も気づかなかつたのだ。また多くの者が、敵に首を渡されないうために法華堂に火をつけることを主張したが、泰村がそれを許さなかつたという。泰村は頼朝の遺徳をけがすのを怖れたのであろう。そして泰村は、三浦一族がこの悲運にあつたのも、亡父義村が多くを死罪にした報いであつて、北条氏も必ず今にその報いを受けるのであろうから、自分としてはいまさら北条一族を恨む気はないと言つたという。

正治元年（二六）一月十三日、頼朝が死んだ。前年の建久九年十二月稲毛重成がその妻の冥福を薦めるために相模川に橋を新たに造った。そしてその供養を行ったが、この重成の妻は頼朝の室政子の妹であった。そこで頼朝は結縁のためこの供養に参列して橋を渡ったが、帰り路に落馬した。そしてこれがもとで病氣となり、ついに死んだのであった。時に年五十三であった。

通説としては、稲毛重成の亡き妻（政子の妹）の追善供養に造った相模川の橋供養に出かけた帰りに落馬し、余病を併発して死去したとしている。『吾妻鏡』の頼朝死去記述の欠脱は、故意に執筆しなかったとする説もあって、永遠の謎である。

『新古今和歌集』の編纂者として、著名な歌人の藤原定家の日記『明月記』によれば、「所勞（病氣）」、それも「頼病（急病）」というのみで、病名ははっきりとされていない。南北朝時代の『保曆間記』や、江戸時代の『盛長私記』によれば、橋供養の帰途に、稲村ヶ崎のあたりで、かつて亡ぼした義仲や義経に平家の怨霊が海中から浮かんで出て悩まし、そのために落馬し、死亡の原因となったとある。

『見聞私記』や『温古隨筆』『武家俗弁説』によれば、女装して女の所に忍んで来た頼朝が、宿直の近習の士に斬られたとあるし、また、それは政子の命令であったともいっている。

『公益俗弁』によると、壇ノ浦で死んだと見せかけた平教経が、橋供養の際に、女装で襲い、頼朝に重傷をおわせ、それが原因で死亡したとある。

近江家実の日記『猪隅関白記』によると、正月十八日の条に「飲水重病、去十一日出家」、廿日の条に「去十三日早世」とある。飲水とは今の糖尿病で、これに怪我や腫物等の余病が併発し



て、死亡したのであろう。

いずれにしても、頼朝が正治元（一一九九）年一月十三日に五十三歳で没したことには違いない。あれほど偉大であった頼朝の、死亡時の記録が伝わっていないということは、すでに各種の記録体制が完備していた鎌倉幕府のあり方としては、非常に不可解な謎である。

安永八（一七七九）年に島津重豪によって改修された石造層塔の頼朝の墓（国指定史跡）を見

つめてみると、立証すべき何の史料も残っていないが、もしかして、北条氏による間接的暗殺ではなかったのかと考えられてくる。即ち、『吾妻鏡』の頼朝の死亡記述の脱漏こそ、北条氏の陰謀を守るために計画的に行なわれた証拠だと言えはしないであろうか。今では永遠に歴史のミス・テリーである。

伝大江広元墓（伝島津忠久墓） ●頼朝墓から

2分 頼朝墓のすぐ東の山裾続きにある。

横穴の中に大江広元（下欄）、その子季光（長州藩毛利家の祖）、島津忠久（下欄）の墓という五輪塔がある。島津、毛利の両氏は頼朝の墓のかたわらに祖廟を設けることによって、それぞれの祖先を顕彰したのである。忠久の墓前に島津重豪が建てた由来碑がある。薄暗い窟内には五輪塔が並び、それにはおびただしい小石が供えられている。この山裾には、三浦一族墓と伝えるやぐらもある。

大江広元と毛利氏

広元は、頼朝の招きで下向、公文所別当、政所別当を兼ね、家務を預かり、幕政に深く参与した。頼朝死後も北条義時、泰時を助けて北条執権独裁体制確立に参与した。

その第1子季光は、相模毛利荘の地頭職となつて毛利姓を名のり、関東評定衆の重職についた。宝治合戦

のとき、妻の兄三浦泰村に組して三浦一族とともに自殺した。

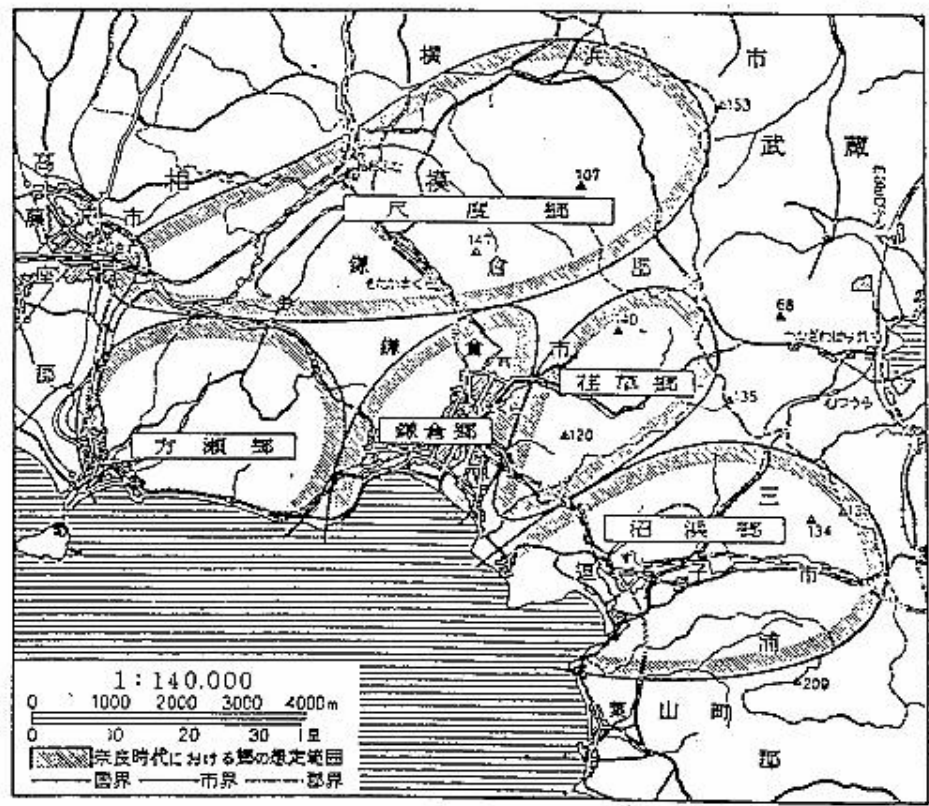
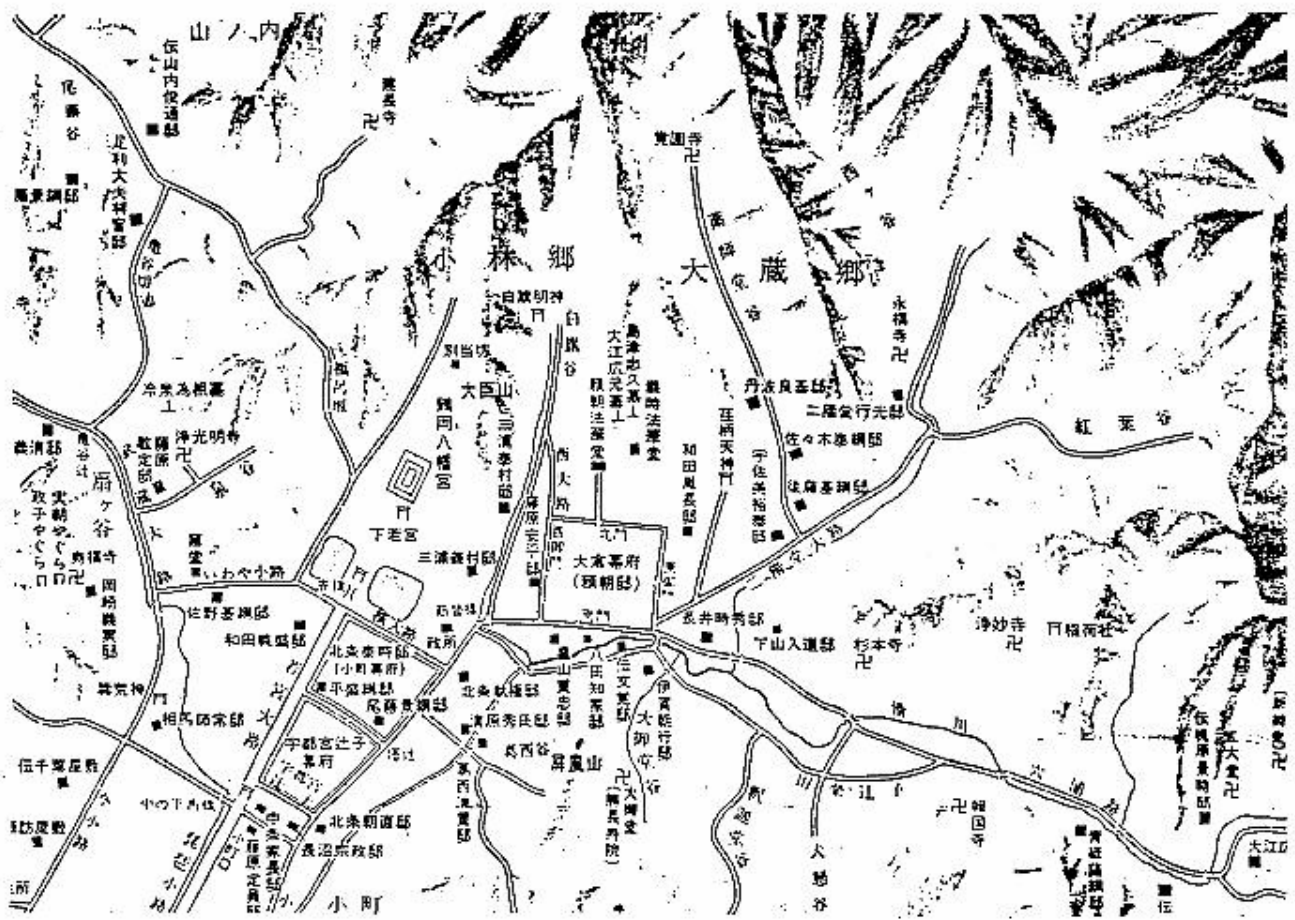
江戸時代を通じて長州を領した毛利氏は、この季光の子孫だと称した。

源頼朝と島津氏

江戸時代、薩摩を領した

島津家の祖忠久は、母が比企能員の妹丹後局という。一説には頼朝の落胤だともいう。いずれにせよ、鎌倉

初めに島津荘の地頭、薩摩大隅、日向三國の守護となる有力武家であった。



鎌倉郷等地域想定図

## 荏柄神社

二階堂宇荏柄七四番地にあり。祭神、菅原道真。相殿に八雲大神（須佐男尊）とも二階堂の鎮守であった熊野三柱神（伊弉諾尊・伊弉册尊・天孫女命）とを祀る（菅公一千年祭記）。例祭七月二十五日。元村社。二階堂の鎮守。境内地一七四四・七六坪。本殿・神門等あり。宮司、岡田実。社伝には長治元年の勅請と伝える。もと別当は一乘院であった。

『相模国封戸租交易帳』と『倭名抄』の荏柄郷がこの辺であることについては『総説篇』第一章を参照。

参道は岐道から鎌倉宮に達する新しい道のため両断され、新しい道と金沢街道までの間は殆んど利用されない。街道に接して立つ石鳥居には明和五年の銘があるが、笠石・貫などが逃げ落ちたままになっている。

社伝では、源頼朝が当社を大倉屋敷の鬼門の鎮守としたという。

日本の神々でもっとも人気のあるのは八幡、天神、稲荷で、この三神で日本の神社の八割を占めている。全国約八万社あるうち、天満宮（天神）は約一万社に上る。

天神ともいわれる菅原道真が亡くなったのは延喜三（一九〇三）年二月二十五日。二月は梅の月である。梅と天神の関係は天神の神紋が梅であり、境内に多い梅の木は道真が生前に梅を愛したからだといわれる。

神奈川県内のおもな天神には鎌倉・荏柄天神社（一一〇四年創始）が広く『吾妻鏡』の時代から知られている。横須賀・久留浜天神社（一六六〇年創始）は三浦半島の八十七ある神社のうち唯一の天神様でもある。横浜・永谷天満宮（一四九三年創始）は江戸時代、本尊像は江戸城に入り將軍家治の拝観を受けたといわれている。さしあたってこの三社が相模国の三大天神といってもよいだろう。

菅原道真は、承和十二（八四五）年六月二十五日学者の家に生まれたといわれる。昌泰二

(八九九)年、藤原時平の左大臣に対して右大臣となった。しかし道真の栄進をねたむ者が多く、政権と学派の争いのなかで延喜元(九〇一)年、時平の中傷によって大宰権帥に左遷された。太宰府の榎寺で謹慎二年の後、没し、死後「学問の神」とあがめられるようになった。だが真相は、道真は先帝宇多上皇とひそかに図って藤原時平に対抗しようとしていた。宇多上皇は天皇在位当時、藤原氏の勢力を抑えて天皇親政を實現しようとして、布石として道真を登用した。道真は藏人頭から参議・大納言と昇進し、宇多天皇の側近として活躍した。次の醍醐天皇にも道真は重用され、時平とともに内覧に任じられ国政に携わった。

宇多上皇は帝位を醍醐天皇の弟・<sup>ときよ</sup>齊世親王に譲らせようと計画したとされる。その計画の中心人物が齊世親王の夫人の父親・道真であった。もしこれが成功していれば、道真は新天皇の外戚となって天下を自由にできたであろうが、クーデターはならなかった。道真のめざましい昇進は藤原氏と一部貴族の反感を買い、九州へ左遷された。道真の死後、宮中では次々と不幸な出来事が起こった。醍醐天皇はノイローゼから衰弱死、時平一族とその派の道真を追放した面々は次々と不幸な死に方をし、道真の崇りとされた。そうした不穏な時期に時平の弟・藤原忠平が對抗馬として突然名乗りをあげた。これらは菅原道真公の崇りであると喧伝し、時平派を神経戦に追い込んだ。忠平は道真を「正義の文人」として世の中に定着させる影の立役者となったうえか、政権まで兄時平から奪い取ることに成功した。ちなみに、この忠平の妻は道真が実子同様にかわいがって育てた姪であった。

かくて道真は没後二十年で神として祀られた。延長元(九二三)年罪を取り消され、後に正一位太政大臣を贈られ、京都・北野神社に学問の神となった。道真は初め雷神や疫病神として恐れられたが、鎌倉時代になると、慈悲の神仏として「学芸、文学の神」となった。



## 鎌倉宮

二階堂字四ツ石一五四番地にあり。東光寺旧跡である。俗に大塔おほとうの宮みやともいう。祭神、護良親王もりながしんのう。例祭八月二十日。元宮幣中社。単立宗教法人。氏子なし。境内地四二六一・一六坪、本殿・中門・拝殿・神饌所・渡廊・制札・手水舎・本殿玉垣・社務所等は渡廊・制札等を除き、いずれも明治二年四月創建当初のもの。大正大震災後復旧工事は昭和二年から四年にかけて終了している。

境内に摂社二、南ノ方を祀る南方社、村上義光を祀る村上社がある。

また、明治六年四月、明治天皇行幸の際建築された行在所（現在この一部を宝物展示場で使用）があり、このほか御寮前玉垣・荒垣・第一鳥居左右玉垣・神札授与所・警衛詰所・湯殿・倉庫・使丁詰所・公衆便所等がある。宮司（本務）、内山義一。勧請は明治二年二月、明治天皇の仰により建立、同年七月二十日、御羽草宮中を出発、鶴岡神主宅を仮神殿として一泊、翌二十一日鎮座。

東方理智光寺旧蹟の山頂には、宝篋印石塔があり、明治十一年、護良親王の御墓と決定され、宮内庁の所管となっている。また、理智光寺にあった御位牌は、もと淨光明寺の慈恩院にあったといひ（『風土記稿』）、明治三年十月二十二日、東慶寺に移された。

本殿裏に護良親王が幽閉されていたと伝えるいわゆる土牢がある。『新編鎌倉志』にも大塔宮土籠とみえてゐるから、この伝えは貞享以前からのものとわかる。しかし大塔宮が幽閉されたところが土の塗籠牢であったことは既に明かにされている。（『鎌倉攷勝考』「風土記稿」）

護良親王は度々尊氏を襲撃しようと考えたらしい。六月七日にはその風聞があつて、尊氏は大兵をもつて守つて事なきを得たという。親王の尊氏打倒の考えには後醍醐天皇も内々は賛成しておられたようである。ところで尊氏の方では親王の計画についてのつゞきならない証拠を握つたらしく、それで天皇に迫つたような形跡がある。鎌倉へ流すというのも尊氏の要求を容れたものではないかと思う。



七月高時の遺子北条時行が諏訪頼重に擁せられ、信濃に兵を起して武蔵に入った。直義は洪川義季・岩松経家らを遣わしてこれを女影原・小手指原・府中などに防いだ。が敗れ、ついで自分から出ていって井出沢に戦ったがまた敗れた。そこで鎌倉に帰って護良親王を殺し、成良親王を奉じて千寿王をも伴って三河に走った。時行はこれと入替って鎌倉に入った。

通説によれば、後醍醐天皇の第廿皇子の護良親王は、建武二（一三三五）年に鎌倉二階堂の東光寺で足利直義の手の者によって斬殺された。首塚は、理智光寺谷の東方山上にある。また、位牌は明治三年に東慶寺に移されている。親王を祀る鎌倉宮は、明治二年に出来上がったもので、明治十一年、正式に親王の墓所と決定されている。

鎌倉の苔寺として有名な妙法寺の境内にも護良親王の墓所がある。これは、妙法寺を再興した五世住持の日叡上人が親王の遺子であったためであろう。今でも鎌倉宮からは年二回、宮司が妙法寺の墓所に参り、妙法寺からは住持が鎌倉宮と理智光寺谷の墓所の参拝を行なっている。

異説によれば、足利直義の家臣洲辺義博は親王を斬ろうとして斬れず、その代りに親王の衣服の一部を切って足利直義に示し、首は藪の中に捨てたと報告した。そして、洲辺は同士をかたからって建武二年七月二十二日夜、ひそかに親王を奉じて海路を逃れ、奥州石巻に上陸して、長く親王に仕えたといわれる。その後、親王は、後醍醐天皇に遅れること十一年目の正平六（一三五二）年九月に奥州で死去した。埋葬地には一皇子大明神として奉祭し、陵墓として今に伝えているのである。

そして親王の鎌倉脱出に供奉したのは、日野、日下、比羅塚、福原、遠山、高橋、岡本、洲辺の八氏で、脱出計画の張本人洲辺氏は文化の頃に絶えたが、日野と、日下の子孫は今も続いている。

# 覚園寺

二階堂宇平子四二一番地にあり。鷲山真言院覺園寺と号する。もとは四宗兼学であったが明治の初年に一寺一宗と定められたので、古縁真言宗となった。現在、實質的に最もこのように四宗にわたる修業勤行を行っている。京都泉涌寺末。開山、智海心慈。開基、北条貞時。

愛染堂 \* 8月10日黒地祓禊のみ公開 元

大樂寺本堂。山ノ内の蓮華院(鹿寺)に移されていたものを、昭和3年に移築改造した。

本尊は高さ1.2余の木造愛染明王坐像(市文化財)で鎌倉後期の作。同じく鎌倉時代の鉄造不動明王坐像(果重文)は、元は大樂寺不動堂の本尊で、神奈川伊勢原の大山寺不動明王(大山不動)造立の雛形として鋳造されたものといわれ、試みの不動。とよばれている。鎌倉末期の元亨2年(一二三二年)院興作の銘がある木造彩色阿闍如来坐像(果重文)も大樂寺から移されたもの。衣文に胡粉で盛りあげた珍しい装飾がある。

ほかにも、木造阿彌陀如来坐像、木造文殊大士坐像、宋朝様を伝える木造伽藍神倚像三體(市文化財)、開山智海心慈や泉涌寺開山、律

宗開祖などの木造肖像彫刻5軀などが所せましと並んでいる。

薬師堂(本堂)(果重文) 古色蒼然とした姿に歴史の重みを感じる。室町初期の文和3年(一三五四年)、足利尊氏の援助で再建された

本堂は、江戸前期の元禄年間(17世紀後半)、当時の古材の一部を使って再建された。その後も修復があったが、方五間禪宗様の仏殿形式をよく残している。天井右側の梁、棟に尊氏の銘がある。堂前に茂るマキ(市天然記念物)は鎌倉一の老樹で、風格がある。

内陣に入ると、須弥壇上に、鎌倉時代作の本尊、木造薬師如来坐像(国重文)、脇侍に室町時代の朝佑作、木造日光・月光両菩薩像(国重文)を安置。いずれも優しさをたたえて、衣文の表現も柔らかく、宋風の仏像彫刻の特徴をよく伝えている。

その左右に、憤怒の相もいかめしく、きびしい木造十二神将立像(果重文)が立ち並んでいる。また、理智光寺(鹿寺)(60)の本尊だったという木造阿彌陀如来坐像(市文化財)が客仏として右側に安置されている。胎内に小仏像を納めていたので、彌阿彌陀の名があり、衣文に「土紋」とよばれる盛上げ文様が残っている。

旧内海家住宅(果重文) 薬師堂の右横に回ると、うっそうたる樹林がきれて谷戸がひろがり、明るい。大悲殿など仏殿の跡地であるこの一郭に移築されている。市内手広にあった旧名主の家柄の古民家である。江戸中期の宝永3年(一七〇六年)の建築。優美な姿で、間取りや入側に特徴がみられる。

建武中興後、後醍醐天皇の勅願所となり、新居西条庄は安堵された。中興が破れるとこんどは北朝、

足利氏の祈願所となった。

文和三年十二月八日、仏殿が完成したらしい。尊氏は虹梁銘に自筆で署名した。

文和三年十二月八日、仏殿が完成したらしい。尊氏は虹梁銘に自筆で署名した。

## 覚園寺の犬神と火焚地蔵

鎌倉宮の前から左の谷戸やとをつめると覚園寺かくげんに出る。この寺は、観光のみの人は歓迎しない静かな落着いた雰囲気をもっている。北条義時が建保六（一二一八）年に薬師堂を建てたのが始まりであり、のちに火災で焼失。北条貞時が永仁四（一二九六）年に修復して、寺として覚園寺と称したのである。現在の茅葺きの薬師堂は足利尊氏が再興したものといわれ、天井右側の梁牌には、尊氏の銘が残っている。堂内には、等身大の十二神将像が置かれ、一見の価値がある。それらの中の犬神は、「バサラ大将」といわれ、歴史の裏面史に関連のある次の話が伝わっている。

建保六年の正月のこと。北条義時の夢枕に、この犬神が現われ、今年の鶴岡八幡宮参賀は無事だが、来年の参賀には、供をしないほうがよいと告げた。翌、承久元（一二一九）年正月二十七日、実朝が八幡宮に参賀し、義時もこれに従ったが、式場に入ろうとした時、白犬の幻が義時の傍らを通った。目眩いがした義時は、剣の奉持の役を源仲章に譲って退出したところ、その後まもなく、実朝が公暉に襲われ、仲章ともども殺害されてしまった。

白犬の幻は薬師堂の犬神の化身である、と思つた義時は、ますます薬師如来を信仰したといわれる。

薬師堂手前右に地蔵堂がある。本尊は黒地蔵とよばれ、一名、火焚地蔵ともいう。この地蔵は、地獄を巡って、罪人の苦しみを見るにしのびないので、みずから獄卒に代わって火を焚き、苦痛を軽くしようとしたため、全身が黒くなったという伝説がある。

# 永福寺跡(復元図)



## 永福寺跡

●鎌倉宮から4分

絵図によるとテニスコートのあたりに繪門があり、それを入ると左の山裾に多宝塔、中か味わい深い。中央に本堂の二階大堂、その左右に脇堂の阿彌陀堂と薬師堂、その前面には広大な死池がひろがり、中に中ノ島を築き、脇堂から渡殿が延び、岸には池にかかって釣殿がある。背後の山腹には鐘樓、薬師堂、三重塔が建つといふ壮麗な一大寺であり、西ガ谷、亀ガ淵には僧坊があったという。

いまはこうした姿を想像するのはむずかしう、総門の礎石があったことにちなむ四ツ石、50年ほど後には鎌倉5代執権北条時頼の本堂、脇堂にちなむ三堂などの小宇が残り、努力で大修理があり、元弘3年(一一三三年)永福寺旧蹟の近くの1/3余の巨石は「吾妻」には鎌倉幕府を倒した新田義貞が、足利尊氏「鏡」にいう畠山重忠(少将下関)が怪力で運ん

だ石だろうか。その近くの雑木のあたりは中しては、室町初期の応永12年(一四〇五)ノ島であったらしい。山裾には礎石と思われ、荒れはてた跡地には、いま、四季おりおりの花がみられ、晩秋にはコスモスが咲き乱れている。

鎌倉初期の仁治3年(一一二二年)に書かれた「東関紀行」は、この破谷を次のように描写している。「鳳の登日に輝き、鳧の鐘に響

き、樓台の莊嚴より始めて、林池ありとに至るまで、殊に心とまり一見ゆ」。この一文を踏

ま、頼朝は奥州藤原氏を討滅し、平泉で見た二階大堂大長

源頼朝は奥州藤原氏を討滅し、平泉で見た二階大堂大長

源頼朝は奥州藤原氏を討滅し、平泉で見た二階大堂大長

源頼朝は奥州藤原氏を討滅し、平泉で見た二階大堂大長

源頼朝は奥州藤原氏を討滅し、平泉で見た二階大堂大長

源頼朝は奥州藤原氏を討滅し、平泉で見た二階大堂大長



## 瑞泉寺

錦屏山と号し、開山は夢窓疎石、開基二階堂道親、中興開基足利基氏。臨濟宗円覚寺派に属する。

瑞泉寺のある谷は紅葉谷といふので、山号の錦屏山はその名をこの谷の紅葉の名からとつたものである。

開山の夢窓疎石は法弟春屋妙葩が撰した『年譜』によると、伊勢の人、宇多源氏の出身で、母は平氏、建治元年(一一三二)に生れた。弘安元年(一一八〇)母方の一族に紛争が起きたので家をあげて甲斐に移った。この年疎石は母を喪つてゐる。弘安六年(一一八六)父に伴われてその地の平塩山寺に出家、一八歳のとき南都に赴き東大寺戒壇院に登壇受戒した。二〇歳の時甲斐を出て紀州由良の西方寺(のち興國寺)の法燈国師無本覚心に参じようとしたが、途申京都で知人の徳照という僧に逢い、「叢林に在つてその規矩を学ぶべき」ことを忠告されて初志をかえ、建仁寺に赴き、住持の無隠円範に附くことになった。無隠は關溪の弟子である。ここから鎌倉禪杯への道がひらけ、永仁三年(一一三三)には建仁寺を辞して鎌倉東勝寺に無及徳詮に参じ、たまたま東勝寺が火災に罹つたので建長寺に移つた。この後建長・円覚及び京の建仁寺に、大覚派(關溪道隆の法系)の人々に参じて修業した。疎石という法諱は『年譜』によると、永仁二年建仁寺に無隠円範に参じたときのこととするが、はじめは智曜といい、のち自ら疎石と改名したものではないかといわれる。(玉村竹二氏『夢窓国師』)

鎌倉の執権北条高時も疎石を静かにさせては置かなかつた。嘉暦元年には疎石は鎌倉に帰り、二階堂に南芳庵を建てて住んでいたが、高時の懇請のために、翌年二月(一一三七)に淨智寺に入つてゐる。疎石が瑞泉院を南芳庵の北に建てて移つたのはその年の八月、五三歳の時であつた。これが瑞泉寺の発端である。

翌年にはここに観音殿及び山頂に徧界一覽亭を建てたが、元徳元年(一一三九)高時に請われてやむなく八月円覚寺に入り、翌年九月円覚寺を退き、甲斐に慧林寺をひらき瑞泉院との間を往復してゐるうちに幕府の滅亡(一一三三)を迎えた。



境内は梅林になっている。本堂の後が庭であるが、前述のように、湯山の裾を削って作られた一二坪足らずの小さいもので、不規則な形と岩盤そのものをもって池岸とし、石橋一つと板橋一枚をかけ地盤と同じ岩塊をこの傍と池畔に配置し、また池中にも一箇を置いただけの簡素なものである（神奈川県指定史蹟）。江戸時代以後滝口を作ったり、池の向うに祖元の青石碑を立てたり、岩壁の一部を削り取ったりしている（『鎌倉歴史散歩』瑞泉寺の項「赤星氏の文」）。また池の右方に一本石の宝篋印塔が一基置かれているが、これは前住が背後の丘を越えたところにあるいぼヶ谷のやぐらから運んできたものである。鎌倉として是最も古い様式のものであるが、九輪と蓮座はここに移されてから看取足したものでこれは新しい。（赤星氏前掲文）

池の向うから岩壁を彫り削って急な石段があり、之を登ると雑木林の山腹に出、更に幾曲りかして坂尾根にでると宝形造の建物がある（昭和十年建立）。これが現在の欄界一覽亭である。住職大下豊道師。

さて、翌嘉曆三年に上述の通り観音殿及び欄界一覽亭が建っているが、またこの時期に庭も造られ、しばしば天下の名刹を会して詩会を催した。疎石には造園の才があり、天龍・西芳・慧林等いづれも名園でないものはない。ここの庭が疎石の作かどうか確証の有無を知らぬが、後の山から泉水をひいて岩盤をうがつた池に水をたたえたもので、赤星直忠氏は南北朝のものであることは間違いないといわれる。（最近県の史蹟に指定された）

### 瑞泉寺と貉塚むじな

（次頁内東十刹の）

鎌倉の五山筆頭にあげられる、花の寺で著名な錦屏山瑞泉寺から訪れたい。この瑞泉寺は嘉曆二（一三二七）年、夢想国師の開山になり、当時は瑞泉院といった。南北朝時代に足利尊氏の子の基氏が中興して以来、関東公方の墓所となり、足利基氏は、この寺号を法名としたのである。

現在、登高禁止になっている裏山の金屏山の頂上には、遍界一覽亭があり、当初のものは、国師が五十五歳の時に出来上がり、鎌倉五山を中心とした禅僧たちが、ここに集まって詩文を作り、風景を愛でたといわれる。現在の亭は、昭和十年に再建されたものである。

また、瑞泉寺には、珍しい伝説や歴史が残っている。山門を入ると、左側に、土まんじゅうを盛りあげたような上に、ささやかな自然石を立てた塚があるが、これを貉塚セシタカという。

貉塚の伝説は、夢想国師が瑞泉寺を創建して間もない頃のこと。国師の徳をしたって近隣の人々はもちろん、近郊近在から法話を聞きに善男善女が集まった。その中に、どこに住んでいるのやら、名前は何と言うのか、里人の誰も知らない年老いた男が一人いた。この老人は、法話のあるたびに一度も欠席せず、国師の説くところを一語も聞きもらすまいと、熱心に聞いていた。「感心な男がいる」と、国師もその男に気がついた。熱心だという以外に、何ら普通の人と変わるところがなく、ただの里人にすぎなかった。ところが日がたつにつれて、集まって来る中の誰かが、「あれはムジナだ。人間に化けているのだ」と、言った。噂は次から次へと伝えられ、法話を聞きに集まる者全部に広がった。「あのムジナはこの山に住む古ムジナで、長年の間、人を化かしたり、畑を荒らしたりして、我々里の者を困らせた奴に違いない。今に尻っほを出すぞ」と、言う者もいた。

しかし、国師は里人の噂を知ってか知らずにか、別に気にとめている様子もなかった。ムジナといわれる男も、自分に対する噂は全く知らないような顔で、説話に耳を傾けているばかりであった。里人の中には、何とかして化けの皮をはがしてやろうと相談する者もいた。そのうちに、皆は誰が殺したか判らないように、だまして殺す方法を考えた。お盆にあと二、三日という七月十日のこと。里人たちは餅をついて、その中に小石を入れ、その男にご馳走したのである。悪企

みを知らない男は平気で食べて「ごちそうさま」と、礼を述べた。翌朝になると瑞泉寺の庭に、<sup>よわい</sup>齡百を越したろうと思われる大きなムジナが死んでいた。そして、その日からの話の席に噂の男は姿を見せなくなった。

国師はムジナの死を悼んで、庭の一隅に埋葬して、ねんごろに弔ったのである。また、餅に石を入れて食べさせた里人も自分たちのいたずらの過ぎたことを悔み、かつ師の前に懺悔して、そのムジナの埋葬を手伝い、立派に土まんじゅうに盛りあげて供養した。そして毎年旧七月十日の命日がくると、里人たちは揃って墓参りをし、貉施餓鬼を盛大に行なったのである。

現在の寺には、かつての華やかな古い建物は何も残っていない。たぶん、この貉塚の話が最も古いものといってよいのであろう。

#### ◆どこも苦地蔵

もと扇ガ谷智岸寺谷の地蔵堂に安置されていたが、大正5年に寄進された。あるとき、貧しさに耐えかねた堂守が、よそへ逃げださうとしたとき、地蔵菩薩が夢枕にたち、「どこもどこも」といって消えた。八幡宮の供僧に話したところ、「どこへいっても苦しいのは同じ」とさとしたのだといわれ、以後、はじめに堂守をつとめた、という。

#### ◇夢窓疎石

鎌倉末期から南北朝期の臨済宗の高僧。建長寺の山一院に参じ、淨智寺の高峰頭日の法を継いだ。三浦半島、上総などに隠棲したが、後醍醐天皇の招請で、京都第一の禪寺、南禅寺に住し、翌年、北条高時の招きで淨智寺にはいるとともに瑞泉院の開山となった。2年後、円覚寺第15世となるが、翌年には退いて甲斐に恵林寺を開創。その3年

後には鎌倉幕府が滅ぶが、以後も多くの京都禅刹の開山に迎えられている。室町将軍家の信任も厚く、政治的にも手腕を發揮し、弟子も多く、それらは夢窓派とよばれ、禅宗界の中樞となつた。

芸術的才能にもすぐれ、とくに作庭に長じ、多くの寺に伝わる。京都西芳寺の庭はその代表として名高い。

## 鎌倉時代略年表

1147	(久安 3)	源頼朝生まれる
1180	(治承 4)	源頼朝挙兵、鎌倉へ入る。 <u>大蔵館建設</u>
1185	(文治 1)	平家滅ぶ
1189	(文治 5)	奥州藤原氏討伐。 <u>永福寺起工</u>
1192	(建久 3)	源頼朝、征夷大將軍に。 <u>鎌倉幕府を開く</u>
1194	(建久 5)	源頼朝、久伊豆神人喧嘩に二階堂行光を遣わす
1199	(正治 1)	<u>源頼朝死す</u>
1203	(建仁 3)	比企一族滅ぶ
1204	(元久 1)	源頼家の死
1205	(元久 2)	畠山一族滅ぶ
1213	(建暦 3)	和田一族滅ぶ
1218	(建保 6)	北条義時、 <u>覚園寺</u> の前身の薬師堂を建てる
1219	(建保 7)	源実朝、公暁に殺害さる
1225	(嘉禄 1)	政子死す
1247	(宝治 1)	<u>三浦一族滅ぶ</u>
1249	(建長 1)	越谷御殿町の建長板碑
1275	(建治 1)	瑞泉寺開山の夢窓疎石生まれる
1285	(弘安 8)	安達一族滅ぶ(霜月騒動)
1327	(嘉暦 2)	夢窓疎石、 <u>瑞泉院</u> を建てる
1333	(元弘 3)	北条一族滅ぶ
1335	(建武 2)	<u>護良親王殺される</u>
1354	(文和 3)	足利尊氏、 <u>覚園寺薬師堂</u> の再建援助

## 参 考 図 書

- 鎌倉市史・総説編 昭和34. 10 鎌倉市史編纂委員会編 鎌倉市刊
- " 社寺編 " " "
- 相模三浦一族 93. 7 奥富敬之著 新人物往来社刊
- 「吾妻鏡」を歩く 88. 3 末広昌雄著 岳書房刊
- 続「吾妻鏡」を歩く 平成2. 1 " "
- 全訳吾妻鏡別巻 54. 4 貴志正造編 新人物往来社刊
- 姓氏家系辞書 43. 5 太田 亮著 新人物往来社刊
- 鎌倉武士物語 91. 5 今野信雄著 河出書房新社刊
- ブルーガイドブックス 鎌倉 89 加藤 恵著 実業之日本社刊